

# 事業所歯科検診受診者の実態調査

(第一報)

福島県立医科大学附属病院 歯科口腔外科

佐久間 知子

## 緒言

従来の歯科保健対策は小児期におけるう蝕予防対策が中心であった。しかし平均寿命が80歳を超え、より質の高い老年期を過ごすために歯周病による歯の喪失を防ぐことが大切になってきた。歯の喪失を防止するためには、ブラッシング等のセルフケアに加え定期的に歯石除去や歯面清掃等のプロフェッショナルケアが必要であり、20歳代以降各ライフステージに応じた適切な予防指導を受けることが大切である。事業所における歯科検診は、被検診者に対して自身の口腔について注意を喚起し、歯科医院によるケアをすすめることが可能であると考えられる。そして被検診者が歯科医院を受診することにより、被検診者のセルフケアの向上と、定期的なプロフェッショナルケアで、歯の喪失防止につながると考えられる。今回、事業所歯科検診が被検診者に対しどこまで指導が可能かを検討するため、福島県労働保健センターの協力で、同センターで施行されている事業所検診における歯科検診の実態を調査したので報告する

## 対象と方法

- 1) 歯科検診受診者の個人データを管理するためのデータベースを作成する
  - 2) 福島県労働保健センターにおいて平成15年から19年まで連続して歯科検診を受けていた事業所の被検診者を対象とし、作成したデータベースに各個人の記録を入力し、統計的解析を加える。
  - 3) 解析したデータから被検診者毎に歯科保健指導を作成し指導をおこなう。
  - 4) 本研究以前の歯科医院受診率と介入後の受診率の変化を次年度の検診時に評価する。
- 以上のように計画を立てた。

今年度は1)についておこなった。くわえて平成15年度から17年度までの三年間の歯科検診受診者について、それぞれ、事業所ごとに、人数、平均年齢、健全歯数、齲歯数、欠損歯数、修復歯数をまとめた。

## 結果

今年度はデータベースの作成および平成15年度から17年度までの歯科検診受診者についての事業所間の比較検討をおこなった

### 1) データベースの作成

マイクロソフトオフィスアクセス2007を用いて、表1のような集計表を作成した。個人の各歯（酸食症の有無を含めて）、歯肉、咬合状態の評価を入力し、年次毎に比較できるように、また事業所ごとに集計し、事業所レベルで比較できるようにプログラムを作成した

### 2) 平成15年度から17年度までの歯科検診受診者についての事業所間の比較検討。

平成15年度から17年度の3年間の内訳は、平成15年度は14事業所、19部門で年2回検診を受ける人数を含めての延べ人数は960人であった。平成16年度は、18事業所

23 部門、延べ人数は 894 人であった。平成 17 年は 20 事業所、23 部門で、延べ人数は 1060 人であった。この中で、3 年間連続して検診をおこなっていた事業所は、10 事業所、11 部門であった。その事業所群を対象にさらに検討を加えた。

まず、受診人数は事業所ごとにまちまちで、最小が 3 名、最大は 193 名であった。また平均年齢は 33.4 才から 49.0 才（平均 40.8 才）であった。健全歯は事業所平均で 8 本から 20 本（平均 15 本）であった。齲歯は事業所平均で、0 本から 4.3 本（平均 1.2 本）であった。欠損歯は事業所平均で 0.2 本から 12.3 本（平均 3.0 本）であった。修復歯は事業所平均で 3.5 本から 16.3 本（平均 9.5 本）であった。酸食症は認められなかった。この集団を被検診者数の多い集団と少ない集団にわけ、さらに、検診回数が年一回と二回の群において比較検討した。これらの中で年 2 回受診している事業所は 6 事業所であった。その中で 30 人前後の事業所（A 群）と 100 人を超える事業所（B 群）を 1 事業所づつ選択し、比較検討を試みた。表 2, 3 に示すように、3 年間で 6 回歯科検診を施行されている。単一年度でも、前期、後期で比較し、齲歯数、処置歯数とも変化が認められなかった。（A）群（B）群とも平均年齢はほぼ 39 才前後であり、健全歯数、齲歯数には差は認められなかった。欠損歯数は（A）群が 1.3 本（B）群が 2.7 本と（B）群が有意に高かった。また修復歯数は（A）群が 11.3 本（B）群 8.6 本と（A）群が有意に高かった。次に年一回施行の事業所は 5 事業所あり、その中で 150 人前後の事業所を C 群、50 人前後の事業所を D 群とし、比較検討した（表 4）。平均年齢は C 群が 36 才、D 群は 39 才であった。D 群の方が、健全歯数平均がやや高く、齲歯数、欠損歯数がやや低かったが、有意な差は認められなかった。

### 考察

年 2 回検診施行群における前期歯科検診において、齲歯が指摘されれば、歯科医院を受診し治療することになり、後期歯科検診時には処置歯としてカウントされ、結果的に齲歯が減少し処置歯数が増加すると考えられるが、今回の検討ではそのような変動がみられなかった。これは、ひとつには、齲歯のあった受診者が歯科医院を受診していないこと考えられる。また、検診者（歯科医師）が、処置歯を健全歯と間違えてカウントしている可能性も否定できない。検診の際に前回の検診結果との比較をしながら注意深く観察をする、また歯科医院を受診したかどうか確認する等工夫することで検診者サイドのミスは減らすことが可能と考える。

各数値をみていくと、B 群において欠損歯数が高いし、修復歯数では A 群が高かった。これを比較検討していくためには、その事業所でおこなわれている保健指導の内容や、立地条件（近くに歯科医院があるか等）、また多数歯欠損者の数などの情報を加味する必要がある。そのために、今後、個人データベースを完成させて、より具体的に内容を検討する必要があると考える。

### まとめ

今年度はデータベースの作成と平成 15 年から平成 17 年までの事業所を対象に、各事業

所平均を算出し検討した。歯科検診が歯科医院受診を促したという数値上の結果は得られなかった。

#### 謝辞

研究に助成をいただきました財団法人福島県労働保健センターに深く感謝申し上げます。

検診日  氏名  検査時年齢   
 名簿CD  生年月日

事業所名：  
 PH

右上8	右上7	右上6	右上5	右上4	右上3	右上2	右上1	左上1	左上2	左上3	左上4	左上5	左上6	左上7	左上8
△	-	OK	△	-	-	-	-	-	-	-	-	-	C2	IN	IN
右下8	右下7	右下6	右下5	右下4	右下3	右下2	右下1	左下1	左下2	左下3	左下4	左下5	左下6	左下7	左下8
△	IN	-	IN	IN	-	-	-	-	-	-	-	-	IN	△	△
歯肉炎	1	歯槽膿漏	0	不正咬	0	その他	0	酸蝕度	0	歯石沈着	1				

備考

検診日  氏名  検査時年齢   
 名簿CD  生年月日

事業所名：  
 PH

右上8	右上7	右上6	右上5	右上4	右上3	右上2	右上1	左上1	左上2	左上3	左上4	左上5	左上6	左上7	左上8
△	-	IN	-	-	-	-	-	-	-	-	-	△	IN	C2	△
右下8	右下7	右下6	右下5	右下4	右下3	右下2	右下1	左下1	左下2	左下3	左下4	左下5	左下6	左下7	左下8
△	RF	C2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IN	C2	△
歯肉炎	1	歯槽膿漏	0	不正咬	0	その他	0	酸蝕度	0	歯石沈着	0				

備考

表1 データベース入力フォーム

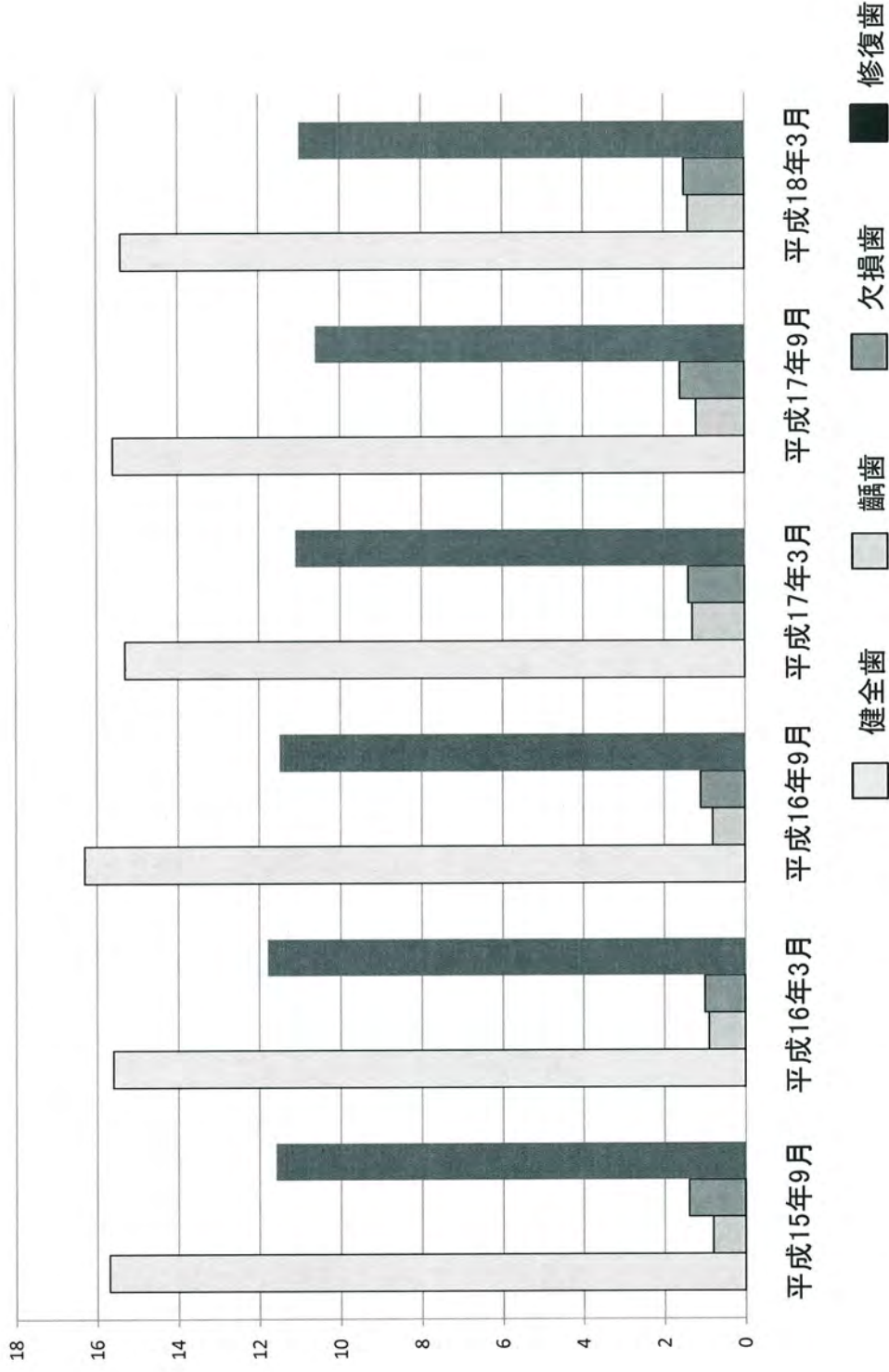


表2 A群：年2回施行事業所  
(平均検診者数112名 平均年齢39才)

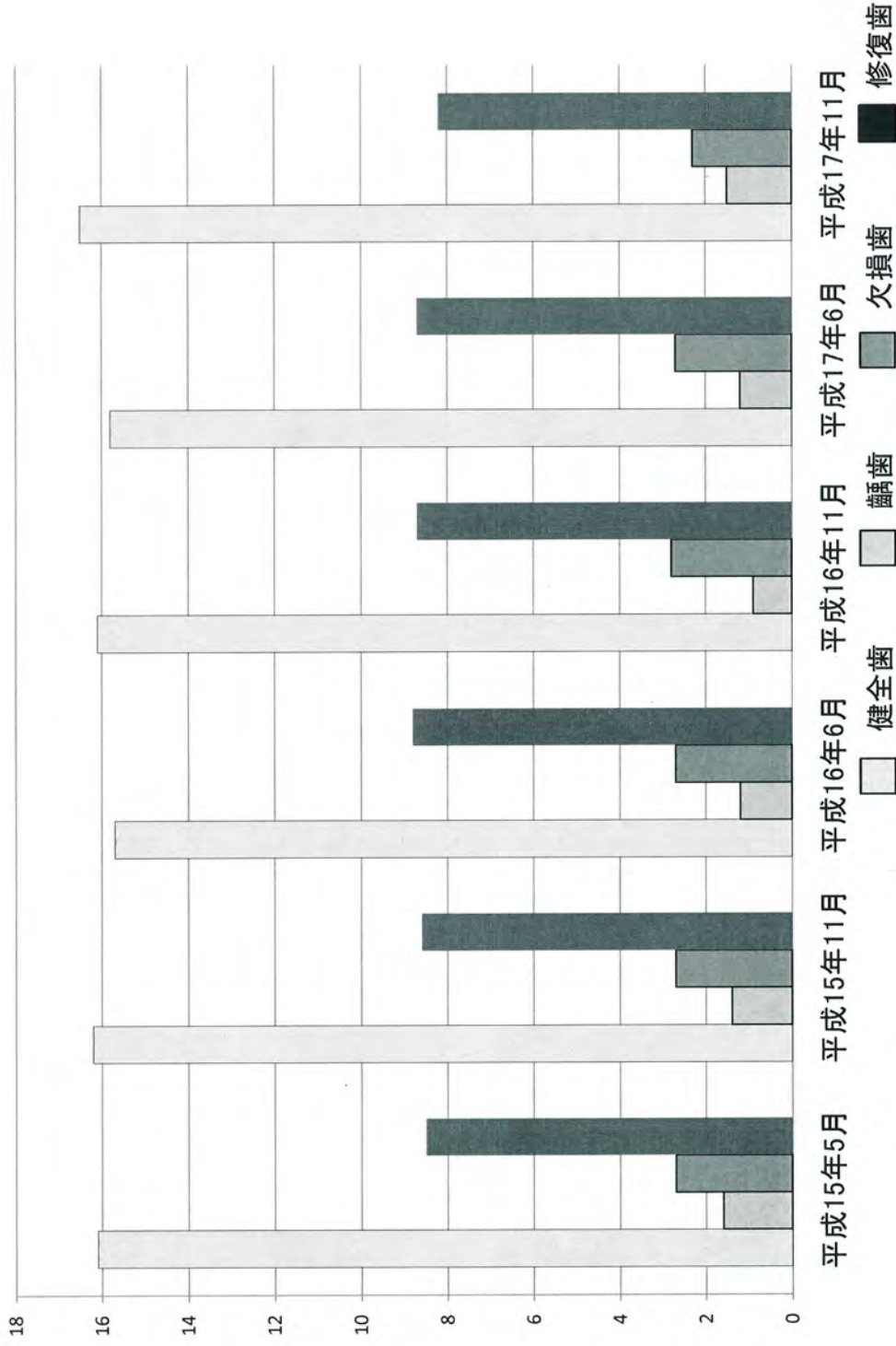


表3 B群：年2回施行事業所  
(平均検診者数29名 平均年齢38才)

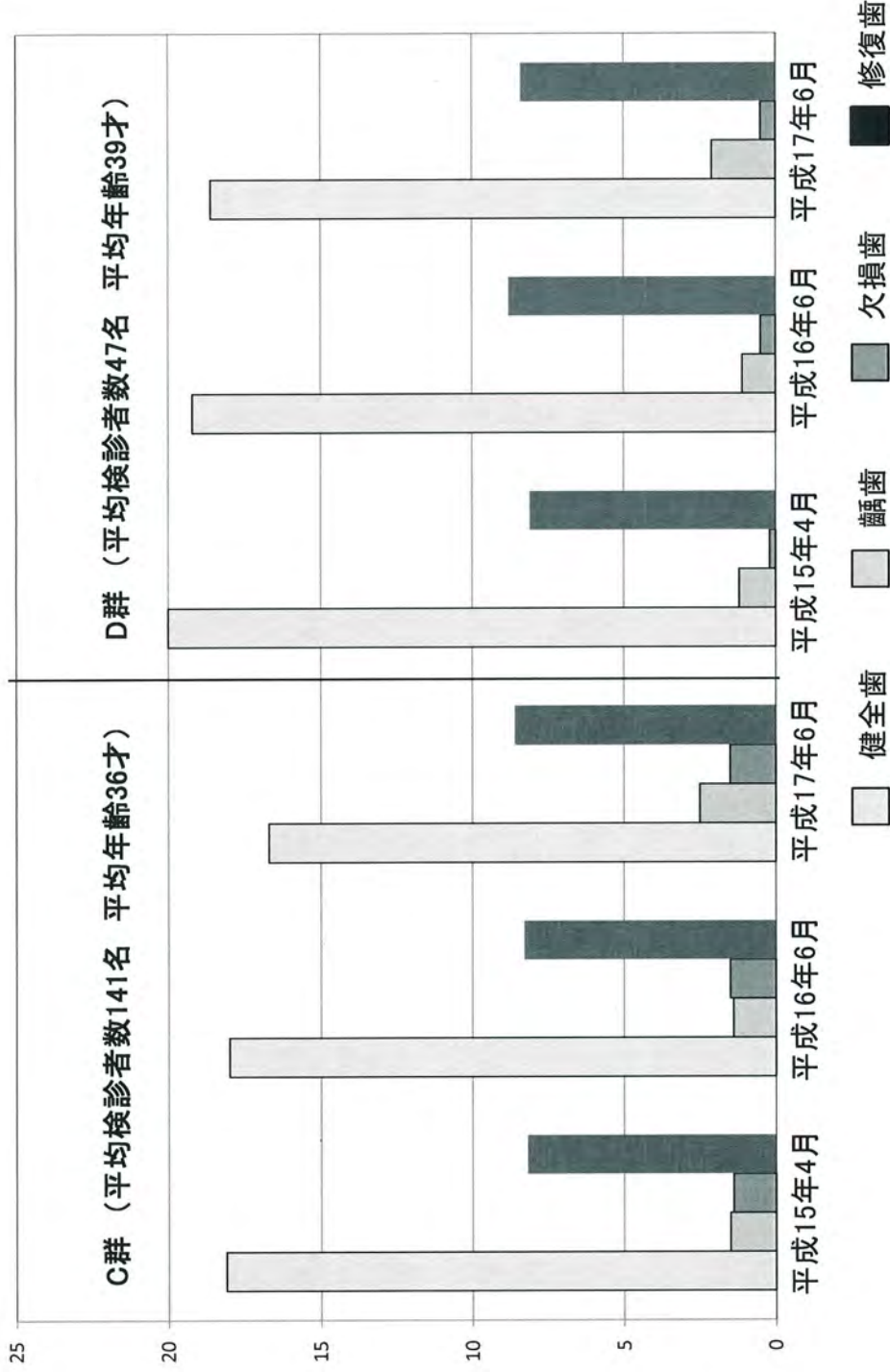


表4 年1回施行事業所